はじめに

近年、学校は、大きな改革の渦の中にある。戦後の日本においては、ながらく教育課程に対して国家が強く統制を行ってきたが、学習指導要領が 1998 年に改訂された折より、各学校が「創意工夫を生かし特色ある教育活動を展開する」ことが求められることとなった。さらに、中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」(2005 年) では、「①目標設定とその実現のための基盤整備を国の責任で行った上で、②市区町村・学校の権限と責任を拡大する分権改革を進めるとともに、③教育の結果の検証を国の責任で行い、義務教育の質を保証する」形をめざす「義務教育の構造改革」が打ち出された。このような方針は、2008 年改訂の学習指導要領においても踏襲されている。

一方で、経済格差の拡大を反映し、学力格差がこれまで以上に問題視されるようになっている。全国学力・学習状況調査で成果を点検するという方針も、学校選択が推進され、学校間競争が激化する中では、学校間格差の拡大を助長するものとなりかねない危険性をはらんでいる。

こうした状況の中、すべての子どもに確かな学力を保障するために、教育方法学に期待される役割は、ますます大きくなっている。学校の権限の拡大が肯定的な効果を生み出すようにするためには、どのような研究が求められているのかについて、改めて考える必要があるだろう。

さて 2008 年度、教育方法学講座は、明和政子准教授を新しいスタッフとして迎えることとなった。明和先生は比較認知発達科学を専門とし、主な著書として『霊長類から人類を読み解く —なぜ「まね」をするのか』(河出書房新社、2004 年)、『心が芽ばえるとき —コミュニケーションの誕生と進化』(NTT 出版、2006 年) がある。著書のタイトルが示すように、人間の心のはたらきの発達とその進化史的基盤を科学的に解明することを目指しておられる方である。新スタッフを迎え、講座としても新しいパワーがみなぎり始めているのを感じることのできた一年であった。

教育方法学講座は、フィールド研究を重視することを一つの特長としている。発達研究と教育方法研究の両者を扱う講座の長所を活かし、一層の研鑽に努めたい。

2009 年 3 月

教育方法学講座准教授

西岡　加名恵